World Food Programme

飢餓から救う。未来を救う。

©WFP Oluwaseun Oluwamuyiwa

長年の紛争にも新型コロナによる食料不安にも負けず、元気に遊ぶナイジェリアの子どもたち。国連 WFP の届ける食料と栄養が、子どもたちの未来に確実につながっています。

国連の食料支援機関

国連WFPニュース

Jul. 2021 Vol.65

特集・アスリートと栄養
南スーダン選手団インタビュー＆ケニアからのメッセージ

SAVING LIVES CHANGING LIVES

特集・アスリートと栄養

南スーダン代表選手が語る母国の困難「食べられない悪夢」をなくしたい

南スーダンは国民の6割が日々の十分な食事を摂れずにいる、世界で最も飢餓の深刻な地域の一つ。選手団の中にも、何も食べられない日々を送った人がいます。私たちには何ができるでしょうか。

選手は平日、前橋市役所の食堂で昼食を取ります。マイケル選手は来日してから、オムライスが好物になったとか。

練習に励むマイケル選手（左）とジョセフ選手（右）。2人とも日本でいくつかの競技会に参加し、好成績を残しています。

父は病死、何も食べられない日も

2011年に独立した世界で最も新しい国、南スーダン。この国から陸上の代表選手とコーチ、計5人がJICA（国際協力機構）の斡旋で2019年11月に来日し、東京オリンピック・パラリンピックへの出場を目指して群馬県前橋市で長期事前キャンプを続けてきました。

滞在中は前橋市が、住まいや3度の食事、練習場などを、協賛企業が衣類やスポーツの道具を、それぞれ提供しています。前橋市へのふるさと納税を通じて、一般の人々からキャンプへの支援も集まっています。

「来日して、毎日3回食べられることが本当にうれしい」と語るのは、パラリンピック100メートルの選手、クティアン・マイケルさん（30歳）。南スーダン中央部の村で育ちましたが、18歳の時に父親を病気で失い、厳しい暮らしを強いられてきました。「家族を支えてくれる人は誰もいません。ラッキーな日は1度ご飯を食べられましたが、何も食べられない日もしょっちゅうでした」パラアスリートとなり首都・ジュバで練習を始めてからも、生活費の援助は一切なかったそう。

クティアン・マイケルさん

「競技場まで歩いて3時間かかり、お金がなくて食べ物を買えない日は、練習に行く力も湧きませんでした。胃が空っぽではトレーニングはできません」。来日して栄養状態が改善したことで、自己ベストは1秒近く縮まりました。

「栄養をつけてエネルギーを蓄えてこそ、パフォーマンスが上がると実感しました。自信がつき、記録を更新したいという意欲も高まりました」

マイケルさんは生まれつき、右腕に障害があります。しかし誰よりも練習熱心で、走りは健常者のアスリートともそん色がありません。将来は母国で、障害者を集めて競技会を開くのが夢です。

ただ今は、帰国して再び飢餓に直面することを恐れています。親しくなった前橋市の職員に「国に帰ってまた食べ物がない、という悪夢を見る」と、ポツリと漏らしたそうです。

ハードル、砲丸…道具にも事欠く困難なトレーニング

南スーダンでは2016年から、国民の結束を強める目的で「全国スポーツ大会」が開かれるようになりました。しかし、砲丸投げやハードルなど、競技の設備すら十分にないのが実状。選手の中にはシューズを買うこともできず、はだしで走る人もいます。

400メートルと400メートルハードルの選手、アクーン・ジョセフさん（19歳）は、国内にハードルを備えた施設がないため、隣国ウガンダでトレーニングしていました。「来日して一番良かったのは、思い切りハードルの練習ができるようになったこと」と話します。週2回、スポーツジムに通うようになって筋肉もつき、記録も縮まったそう。

アクーン・ジョセフさん

コーチのオミロク・ジョセフさん

コーチのオミロク・ジョセフさん（60歳）は「南スーダンは新しい国で経済成長も進まず脆弱、衣食住すべてが手に入りづらい状態。日本ではすべて用意されており、とてもありがたいです」と、感謝の言葉を口にします。選手たちは、栄養状態が改善して身体能力が向上したことに加え、「日本で多くの陸上選手と関わる中で、スポーツに関する知識など、他にもたくさんのものを得られた」とも語ります。

マイケル選手、ジョセフ選手はともに「自分のためだけでなく、南スーダン国民の心を一つにし、平和をもたらすために走りたい」と抱負を述べました。またジョセフコーチは日本の人々に、こんなメッセージを送りました。

「皆さんは私たち選手団を支えるだけでなく、スポーツを通じて南スーダンの平和にも、貢献して下さっていると言えるのです。ぜひこれからも南スーダンを身近に感じ、支えてほしいです」

700万人以上が飢える懸念

総合的食料安全保障レベル分類（IPC）評価によると、南スーダンでは農作物の収穫量が減る7月になると、724万人が深刻な飢餓に直面し、140万人の子どもが急性栄養不良に陥る恐れがあります。しかし今年4月、国連WFPは資金不足のため、同国で1人当たりの食料配給量を削減すると発表しました。これによって難民や国内避難民、70万人近くが影響を受ける見通しです。

飢える恐怖のあまり、悪夢を見るというマイケルさんのような人を一日でも早くなくすため、国連WFPは厳しい状況の中でも懸命に、現地での食料支援を続けています。

（取材協力：群馬県前橋市）

国連WFP × アスリートといえば、「給食が育てた、世界記録。」

2006年の国連WFPのAC広告を皆さんは覚えていらっしゃいますでしょうか。この年起用されたケニアのポール・テルガトさんは、国連WFPの学校給食により空腹から解放されて育ちました。そしてついにはアスリートの1つの頂点、マラソンの世界記録保持者に。この広告から15年、栄養をめぐるケニアのいまを「娘の視点で」お伝えします。

ケニアからのメッセージ　裏面へ

FROM KENYA

特集・アスリートと栄養

かつて学校給食で育ったアスリートの父 いま娘が支援を成長させる

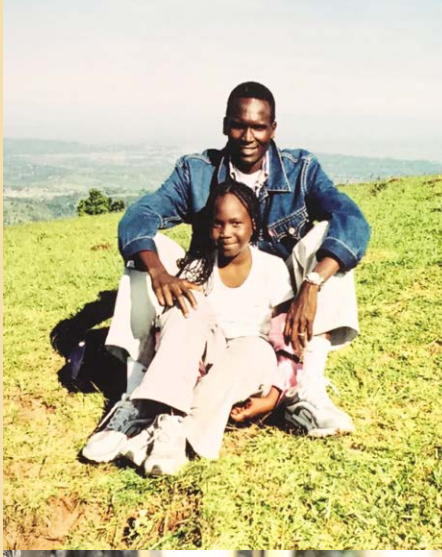
国連 WFP の学校給食で育ち、マラソン世界記録保持者となったポール・テルガトさん。その娘のハリエット・テルガトさんは今、国連 WFPのケニア事務所で働き、飢餓に苦しむ人々を支える側に回りました。ハリエットさんに、家族の思い出や仕事への思いを語ってもらいました。

私が生まれた時、父は出産に立ち会った直後にイギリスへ渡り、ダラムの大会で優勝しました。だから私には「ダラム」というミドルネームが付いています。私たち子どもは、父の走るモチベーションになっていました。銀メダルを得たシドニー五輪1万メートルも、ライバル選手との駆け引きや激しいデッドヒートが印象的でした。父は生まれたばかりの妹のために走り、私も兄弟も、祈りながら見守っていたのを覚えています。

父と母は、子ども時代に国連WFPの学校給食支援を受けました。これが縁となって、父は2004年、国連WFP飢餓撲滅大使に就任。一方で、自分の財団を通じて独自の食料支援もしていました。私は父の活動を通じて国連WFPを知り、自分も志の高い活動に参加したいと思うようになったのです。

私は今国連WFPで、農業のデジタル化や、農家と民間企業の連携を進めるリーダーを務めています。目の前の仕事に全力で取り組むことに、やりがいを感じています。

ケニアは父の子ども時代に比べると、生活が大きく改善しました。農業の発展に伴い、給食支援の食材も外部の援助から、地産地消に変わりつつあります。長い道のりの末、今の姿へと前進を続けてきたこの国を誇りに思います。



国連 WFP ケニア事務所勤務
ハリエット・ダラム・テルガト
Photo: Harriet Tergat

身近にできる国連WFP支援　レッドカップキャンペーン

シーライン東京、あさくま、ザ・プリンス 箱根芦ノ湖、スリーケーの各社が新たに参加しました。売り上げの一部は学校給食支援に寄付されます。
https://www.jawfp.org/redcup/

飢餓から救う。未来を救う。
WFP
国連世界食糧計画

株式会社シーライン東京	株式会社あさくま	ザ・プリンス箱根芦ノ湖	株式会社スリーケー
シンフォニークルーズ	キャンペーン参加メニュー（時期により変わります）	宿泊プラン	排水管洗浄液

WFP World Food Programme

国連WFP
https://ja.wfp.org
0120-496-819
受付時間 9:00～18:00
（通話料無料・年始を除く年中無休）

国連WFPは「飢餓をゼロに」の実現を通して、SDGsのさまざまな目標の達成に貢献しています。

貢献する SDGs の一例

ご寄付はこちら

WFP.JP
WFP_JP
wfp_japanoffice
WFPJapanOffice

メルマガ登録

ShareTheMeal
App Store からダウンロード
Google Play で手に入れよう

国連WFP（国連世界食糧計画日本事務所・国連WFP協会）〒220-0012横浜市西区みなとみらい1-1-1パシフィコ横浜6F